

岩地正八幡神社神像



箱の裏書	台座の裏書
よみ	いわじしょうはちまんじん じゃしんぞう
指定	市指定有形文化財
種別	彫刻
所在地	御前崎市下朝比奈239番地の2
所有者	岩地正八幡神社保存会
指定日	平成27年12月25日

詳細情報

構 造	おそらくヒノキ材による堅一材一木造。頭部は襟で本体に差首、両手首別材で袖に矧ぎ付ける。冠の頂別材で後補。両手首後補。持物後補。平緒と裾、沓は彩色。台座彩色。髪、眉、眼、髭は墨彩。
法 量	総高【37.3cm】・冠～顎髭【14.1cm】・面幅【4.8cm】・面長【7.6cm】 肩幅【8.6cm】・肘張【16.3cm】・袖張【17.6cm】・胸厚・腹厚【7.0cm】 裾張【9.5cm】・左右欄の間【14.4cm】・足先間【外8.1cm】【内3.1cm】
箱 裏 書	『天保十年 八月望日 奉納 延壽庵二世 行年七十四翁』
台 座	裏に「あさひな■■」の墨書銘有。法量は正面【18.0cm】・高さ【4.1cm】

解説

平安時代には神仏習合(日本の神々と仏教の仏は基本的に同一という考え、後に垂迹思想に発展)という思想が生まれ、仏像の影響を受けて、神像を造ることが始められた。元来、神道では自然界に宿る霊的存在(山、滝、巨大な岩や巨木)を神として信仰していたので、神像というものは存在しなかった。そのため、神像については形式的な規定がなく、最初の神像は僧侶の形をした僧形八幡神であった。これはおそらく神が仏教に帰依するという考えから生まれたもので、従来、地藏菩薩と考えられていた像の何点かは神像と思われるものも存在する。この最も早い作例として、前述の薬師寺の鎮守八幡社の僧形八幡神と神功皇后、仲津姫の三尊像が知られている。次に表れたのは俗体の神像で、貴族の衣冠束帯姿で造られた。これは、八幡神が応神天皇と同体という考えに由来するらしい。

岩地正八幡神社神像は、頭に冠をかぶり、袴を着し、前面に平緒を垂らし、飾り太刀を帯している。右手に矢、左手に弓を持し、沓をはいて台座上に直立している。衣冠束帯姿で造られた神像であり、これは岩地正八幡神社の祭神である八幡神が応神天皇と同体という考えに由来するらしい。

箱の裏書に天保10年(1839)という年号があることから、その頃の作と考えられる。静岡県内の神像は東部の伊豆山神社などに何体か存在するが、中部以西では非常に珍しい。本像は江戸時代末期の作で、さほど古い像ではあるが、県内における数少ない神像の作例として貴重なものと言える。

